

聖書：Iサムエル2：11～36

説教題：主のさばきと恵み

日時：2015年8月9日

2章後半に記されているのは祭司エリの家庭の状況です。ここにいかにもこの時代が士師記に続く暗黒の時代であったかが示されています。まず注目したいのはエリの二人の息子ホフニとピネハス。1章3節に記されていましたが、この二人の息子たちも祭司でした。しかし全くそれにふさわしくない悪党ぶりがここに描かれています。

まず彼らは主の民のささげものを勝手に横取りしていました。律法には、民のささげものの中から祭司が取って良い部分が定められていました。レビ記7章には、和解のいけにえの内、胸と右のものは祭司のものとあります。また申命記18章には、牛でも羊でもいけにえの肩と両方の頬と胃は祭司のものとあります。このようにして祭司が民のささげものの中から生活を支えられることは主の御心でした。しかしホフニとピネハスは、これで満足しません。彼らは誰かがいけにえをささげていると、まだ肉を煮ている間に三又の肉刺しを手にとって来て、なべや釜に突き入れ、取り上げたものはみな自分のものとして取っていました。また脂肪を焼く前に、それを取り上げようとしました。16節で民が「まず、脂肪をすっかり焼いて煙にし、好きなだけお取りなさい。」と言いますが、彼らは「今すぐ、その肉を渡しなさい。祭司が受け取るのは、生の肉だけです。」と言います。彼らは新鮮な肉を早く手にしたかったのでしょう。そしてもし民が渡さないなら、力づくで取るとまで脅迫します。こうして彼らは主へのささげものを侮り、また主ご自身を侮りました。自分の欲望を満たすことを第一とし、神を第二、第三の位置に置いたのです。

さらに22節にもう一つの悪行が記されています。彼らは会見の天幕の入口で仕えている女たちと寝ていました。それは民全体に知られているほど、公然と行われていました。そこで父エリは息子たちに、「なぜ、お前たちはこんなことをするのだ。子たちよ。そういうことをしてはいけない。」と言いますが、その言葉には威力がありません。しかし25節後半に注目すべき言葉があります。「彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。彼らを殺すことが主のみこころであったからである。」

何気なくこれを読むと、私たちは次のように読んでしまいがちではないでしょうか。ホフニとピネハスはエリの忠告にさえも耳を貸さなかった。そこで主によって殺されることになった、と。しかしよく見ると、言われていることはその反対です。彼らはここで父の忠告に聞きませんでした。なぜなら、それは彼らを殺すことが主のみこ

ろだったから、と。これはどういうことでしょうか。これは彼らが聞く耳を持たなかったのは主のさばきであったということです。彼らは主の働きを担う特別の恵みを受けた者たちでした。その彼らは主を侮り、やりたい放題の悪を行ないました。最初にそれらのことをし始めた時は、いくらか良心の咎めもあったでしょう。また民からも、そういうことをしてはいけないと言われていました。そのように彼らが悪の道を進むことに対する引き留め、あるいは悔い改めへの促しは常にありました。ところが彼らはそれを押し切って、欲望を満たすことを追求し続けました。そういう者へのさばきとして、主はもはや彼らを引き止めようとはなさらず、むしろ彼らの頑なさに引き渡されたのです。そのため彼らは父の語る言葉を今や少しも意に介さなかった。それはいよいよ滅びへ突進するためです。

同じ真理はローマ1章18節からの部分にはっきり述べられています。神は「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、天から怒りを啓示している」と述べられていますが、それは具体的にどのように現わされているのでしょうか。それは人々を行くがままに放置することにおいてです。ローマ書1章24節、26節、28節には繰り返し、「神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡された」という表現が出てきます。神は私たちが悪の道に突っ走ることがないように、様々な手段で引き留めてくださっていますが、その神の働きかけを繰り返し拒絶し、聞き入れないなら、神はついに恵みの手を取り去り、彼らの汚れた思いに彼らを引き渡される。するとその人々はその道を一層突っ走り、引き返すことができなくなってしまうのです。悔い改めが不可能となり、滅びへ突進するのです。これは主のさばきなのです。

ですから、悔い改めのチャンスはいつまでも与えられると思っただけではありません。なすべきと分かっている正しい道に歩まず、今回はいいだろう、これくらいは許されるだろうと言って、主の促しを退けていると、主はついに私を引き止めて下さらなくなる。その結果、私は自分の欲望に強力に駆り立てられて、引き返して来れない道を急ぎ走ってしまう。イエス様は「どんな罪でも赦して頂けるが、聖霊を汚す罪は赦されない。」と言われました。ホフニとピネハスの罪は、まさにこの聖霊を汚す罪と言えます。その人は悔い改めという唯一の救われるための道を退け、自分を救われない者とするのです。ですから私たちはそういう状態に至らないように、遅すぎる時が来る前に、むしろ今すぐ悔い改めへと向かう者でなければならぬのです。そうでなければ、ホフニとピネハスと同じ運命をたどることになってしまうのです。

さて、今日の箇所では父エリの問題も指摘されています。27節以降にはエリの家に対する主のさばきが宣告されていますが、29節に「あなたは、私よりも自分の息子た

ちを重んじた」という主の言葉が語られています。エリは確かに息子たちを叱責しましたが、それは明らかに不十分であったということでしょう。エリは4章18節で「40年間イスラエルをさばいた」と言われますように、さばき人としての権威を与えられていました。ですから弱々しい注意ではなく、主の前で悔い改めない息子たちに厳しい対処をなすべきでした。しかし彼は自分の息子たちを言わば大目に見た。そして冒流行為が続けられることを放置したのです。このことにおいて彼は主を愛するより、自分の息子たちを愛していることを明らかに示したのです。

私たちどうでしょうか。目の前の人を重んじるあまり、神を二の次、三の次にすることはないでしょうか。たとえば親しい誰かに何かを相談された場合、私たちはなるべくその人が思っていることをその通りに支持してあげたいと思います。そのあまり、神に対してなすべき義務を果たさなくても、こういう場合はいいのよ、などと無責任に言うてしまうことはないでしょうか。目の前にいる人との人間関係を壊したくない、その人との良好な関係を保ちたいがために、神を犠牲にしていることはないでしょうか。そうすることによってエリと同様、神から「あなたは人を重んじてわたしを軽んじた」と言われることはないでしょうか。

このために30節から、エリの家へのさばきが語られています。「わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。わたしをさげすむ者は軽んじられる。」また34節では、二人の息子ホフニとピネハスが、一日の内に死ぬと言われています。これはこの後4章で成就します。そして35節では、エリの家を祭司としての働きは他の祭司にとって代わられると言われています。36節では、エリの家は食べ物を希わなければならないほどの貧困生活へ追いやられることが言われています。

以上のような主のさばきが示され、宣告されている第一サムエル記2章後半。しかし私たちはこの主の記事の中に恵みもまた織り交ぜられていることを見ます。今日の箇所は非常に特徴ある書き方がなされています。それはホフニとピネハスに関する記事が途中途中で中断されて、サムエルについての短いコメントが挿入されていることです。祭司エリとその息子たちの話は連続性があるものですから、一つにまとめて書かれて良いはずですが、ところがあえて、その間、間に、幼子サムエルについての言及が挟み込まれています。もう一度全体を眺めてみますと、11節はサムエルについての記述で、続く12節～17節にはホフニとピネハスの悪行ぶりが記されています。そしてその話が一旦中断されて18節～21節にサムエルの成長とその両親のことが挟み込まれ、また22節～25節までホフニとピネハスのことが書かれます。そしてまた26節でサムエルについての短い言及があり、27～36節までエリの家に対するさばきが記されます。

そして3章1節でまたサムエルのことが語られます。この書き方は何を意図しているのでしょうか。それは今日の箇所は、その多くが絶望的な暗い話ではあるものの、希望が全くないというわけではない！ということです。目立たない小さなコメントかもしれませんが、希望のヒントが織り交ぜられている！そこに神の働きがある！ということです。祭司エリの家が罪が圧倒的な分量で記されている中、まだ特別な働きをしているわけではない幼子サムエルが日に日に成長していたという話は、取るに足りないことのようにも人の目には映るでしょう。しかし神の働きはいつもドラマティックな形で現われるとは限らない。むしろそれは今日の箇所のように小さく、静かな形で、私たちがそれとは気がつかない内に始まっているのです。この章のサムエルについての短いコメントは、小さな声でありつつも、読む私たちに「神はここにおられる」「神はここでも働いておられる」とささやく役割を果たしているのです。

私たちはこのことを自分の生活に当てはめるべきでしょう。この時のイスラエルが深い闇に包まれていたように、私たちの生活も時に暗やみで覆われているだけにように思われることがあるかもしれません。落胆すべき要素ばかりが目につく状況があるかもしれません。しかし今日の御言葉から教えられることは、そんな中でも神は私たちを見捨ててはおられないということ。それは目立たなく、小さな仕方においてであるかも知れません。しかし神はそこで静かに働いてくださっている。35節に「わたしは、わたしの心と思いの中で事を行なう忠実な祭司を、わたしのために起こそう。」とあります。主は祭司制度がこのように墮落しているからと言って、もうイスラエルは捨てた！とはされないのです。ご自身の栄光のために、ご自身の真実をかけて、なお民をあわれみ、導き続けて下さるのです。

しかしこのことは私たちの罪の生活を助長したり、奨励するものでは決してありません。どんな罪を犯していても神は守ってくださるとは聖書は約束していません。聖霊の働きを無視したホフニとピネハスはその後、さばかれるのです。むしろその彼らが滅ぼされ、取り除かれることを通して、主はイスラエルを守り、彼らを祝福して行かれるのです。ですから私たちが今日の箇所から導かれるべきことは、ホフニとピネハスのようにならないように！ということでしょう。彼らのように悔い改めの機会を拒否し続けることによって、自分の欲望と頑なさに引き渡されることがないように！ということでしょう。イエス様はマルコの福音書3章28～29節で言われました。「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」聖霊を汚す罪は自ら

の罪の赦しを不可能にする一方、心柔らかくして悔い改めるならどんな大罪でも赦されると確言されています。ですから私たちは悔い改めるべきことがあるなら、直ちに主に立ち返りたいと思います。その人は確かに赦していただくことができますのです。

そして赦しの恵みを頂いた者として、神の民の一人として、あわれみ深い神に望みを置いて歩みたいと思います。どんな中に今、置かれていても、私たちが全く捨てられているということはないのです。私たちの鈍い目には留まらない仕方であるかもしれませんが、神は救いの御業を続けてくださっている。サムエルについての短い言及が織り交ぜられていたように、私たちが重大に考えていないところで私たちの救いを備えてくださる。その神を仰がせられて、罪の闇が覆い、主のさばきが執行される中でも、主により頼む者を主は救ってくださると告白し、この恵みの主に従う歩みへと心強められてまいりたく思います。